

## 八重山歌謡に見える蟹

山 里 純 一

八重山諸島には蟹を主題とした歌謡がある。農民の労働歌として男女の掛け合いで謡われる「網張のみだが一まユンタ」と、三線伴奏による節歌（ふしうた）として謡われる「やぐじゃーま節」である。

## 【網張のみだが一まユンタ】

網張（あんぱる）とは、石垣島の西南部の名蔵川が名蔵湾に注ぐ河口部からマングローブが繁茂する湿地帯にかけての地名である。その網張に生息する蟹を擬人化した歌詞が見える。なおユンタとは八重山古謡の一つのジャンルを言う。

一	網張ぬ ミダガーマデンドゥ	網張に棲む ツノメガニだぞ
二	潮 <small>すー</small> ヤ干 <small>びー</small> シャ 下 <small>しむ</small> ヌ家 <small>やー</small> カイ	潮が引いたら（干潮の時は） 下方にある家へ行き
三	潮 <small>すー</small> ヤ満 <small>ん</small> チャ 上 <small>うい</small> ヌ家カイ	潮が満てば（満潮の時は） 上方にある家へ行き
四	下ヌ家ヤ 瓦 <small>から</small> 葺 <small>ぶ</small> キデンドゥ	下方の家は 瓦葺きだぞ
五	上ヌ家ヤ 茅 <small>かや</small> 葺 <small>ぶ</small> キデンドゥ	上方の家は 茅葺きだぞ
六	ミダガーマヌ 生 <small>まり</small> 年 <small>どうし</small> デンドゥ	ツノメガニは 生年祝いだぞ
七	蟹 <small>かん</small> 数 <small>かじい</small> ヌ 踊 <small>か</small> リヌアンドゥ	蟹ども総出の 踊りがあるぞ
八	ギィダサー蟹 <small>かん</small> ヤ 準 <small>にんじゅ</small> 備人数	ミナミオカガニは 準備係
九	ダーナー蟹ヤ 栈 <small>さんしき</small> 敷人数	オキナワアナジャコは 栈敷を作る係
一〇	ピンギャー蟹ヤ 笛吹キィ人数	キンセンガニは 笛を吹く役
一一	キガラン蟹や	タイワンガサミは

	太鼓人数	太鼓を打つ役
一二	ムミンピキィ蟹ヤ	オキナワハクセンシオマネキは
	三味線人数	三線を弾く役
一三	ヤグジャーマ蟹ヤ	ヒメシオマネキは
	踊リィ人数	踊りをする役
一四	アブシィン蟹ヤ	アシハラガニは
	狂言人数	狂言をする役
一五	チィナン蟹ヤ	モクズガニは
	銅鑼打チィ人数	銅鑼を打つ役
一六	バダレー蟹ヤ	ミナミベニツケガニは
	棒打チィ人数	棒を打つ役
一七	フサマラー蟹ヤ	ケブカオウギガニは
	獅子被 <sup>か</sup> ビ人数	獅子を被る役
一八	ガーシィメー蟹ヤ	ノコギリガザミは
	包 <sup>ぼーごー</sup> 丁人数	包丁の係
一九	ヤフチャン蟹ヤ	クマドリオウギガニは
	神饌 <sup>くぼん</sup> 人数	神饌を調理する役
二〇	フノーラ蟹ヤ	舟浦蟹（ソデカラッパ）は
	膳配 <sup>じんぱい</sup> 人数	配膳をする役
二一	パルマヤー蟹ヤ	ミナミスナガニは
	給仕人数	給仕をする役
二二	ダーナー蟹ヤ	オキナワアナジャコは
	見物人数	見物する役

注：歌詞は喜舎場永珣『八重山古謡（上）』（沖縄タイムス出版部、1970年）61～65頁。但し番号と訳に手を加えた。蟹の同定は大山了己『うすれゆく島嶼文化—歌謡と自然認識の世界—』（ひるぎ社、1995年）29～31頁。

「網張のみだがーまユンタ」はユンタの中でも男女が交互に謡うところの囃子が独特である。一番から三番の歌詞のはじめまでの歌唱法を例示すると次のようになる。

- 一 (男) 網張ぬ
- (女) ウリ
- (男) 「ミダガーマ デンドゥ」ハーハイヘー
- (女) マタ ハーハイヘー
- (男) マタ ハーハイヘー

二 (女) マタ ハイヤーヌ カーヌシイ「潮ヤ干シャ」

(男) ウリ

(女) 「下ヌ家カイ」ハーハイヘー

(男) マタ ハーハイヘー

(女) マタ ハーハイヘー

三 (男) マタ ハイヤーヌ カーヌシイ「潮ヤ満チャ」三番の次の歌詞へと続く。

この歌では、主人公のミダガーマ（ツノメガニ）の生年祝いにあたり、ミダガーマを除く 14 種類（ダーナー蟹は二度出てくる）の蟹をそれぞれ祝宴の係に割り当てている。

これだけ大がかり生年祝いというのは単なる誕生日祝いではなく、子や孫、親戚、招待者で盛大に行う 61 歳（還暦）以上の生年祝いを想定した内容であろう。ちなみに明治 24 年生まれ宮城文の『八重山生活誌』（沖縄タイムス社、1972 年）によれば、61 歳以上の生年祝いには、余興として子孫や近親者は踊りや狂言などを演じ、次のような諸係があったという（408～410 頁）。

余興係 2 人

接待係 男 2 人、女 2 人

下足番 男児（12、3 才の男児）

ジンバイ（道具係）4 人（8、9 才の男児）

給仕 4 人

茶係 1 人（男）

食事係 4 人（女）

ポーザー（庖丁人）2 人

ポーザーヌマイチカイ（庖丁人の手伝い） 4 人（女 2 人、男 2 人）

カシキアタリ（赤飯係） 2 人（女）

菓子係 4 人（男 2 人、女 2 人）

配膳係 2 人（男）

水汲係（10 歳前後の女児）

ここには三味線・笛・太鼓の係は見えないが、子や孫や近親者の踊りには地謡を伴うので、そうした役割は当然あったはずである。棒術や獅子舞が生年祝いで演じられたかは疑問であるが、余興係はそうした出し物全体の責任者であろう。ここには包丁、給仕、配膳の係も見える。

「網張のみだがーまユンタ」はこうした 61 歳以上の生年祝いにおける祝宴の諸係（役割）の存在を念頭に、蟹の姿態、習性を擬人化したものであろう。無学の庶民が蟹をよく

観察して、人間世界の祝宴における諸役割を思いついて歌にし、田草取りなどの労働の場で謡っていたのである。

ただ上掲の「網張のみだが一まユンタ」は字石垣に伝わるもので、宮良當壯が紹介する字大川のものは、ミダガーマの生年祝いではなく旧暦7月に山に行って脂松の木端を取り田や野に行って稲粟の穂を取り、網張に降りて行く、という歌詞に続いて、六種類の蟹と三匹の魚を擬人化した役割が記されている。蟹の数は大幅に減って、九番の歌詞に出てくるダーナー蟹は「見物人数」に、一二番の歌詞に出てくるムミンピキ蟹は「地歌人数」に、一八番の歌詞に出てくるガーシメー蟹は「腕振る人数」に、二一番の歌詞に出てくるパルマヤー蟹は「棒打ち人数」に擬せられている。そして一三番のヤグジャーマ蟹は「踊る人数」から「三線人数」に役割が変わっている。

また十番の「笛吹き人数」、十三番の「踊り人数」、十四番の「狂言人数」は蟹ではなく、魚が擬人化されている。

これを比較して見ると次の表のようになる。

(表) 擬人化された蟹の異同

	役割 (係)	石 垣	大 川
①	ミダガーマ	生年祝い主人公	生年祝い主人公
⑧	ギィダーサ蟹	準備人数	
⑨	ダーナー蟹	栈敷人数	▲見物人数
⑩	ピンギャー蟹	笛吹き人数	▲笛吹き人数 (▲笛吹き魚)
⑪	キガラン蟹	太鼓打ち人数	
⑫	ムミンピキ蟹	三味線人数	▲地歌人数
⑬	ヤグジャーマ蟹	踊り人数	▲三線人数 踊り人数 (▲踊りゃ魚)
⑭	アブシィン蟹	狂言人数	▲狂言人数 (▲コーフ魚)
⑮	チィナン蟹	銅鑼打ち人数	
⑯	バダレー蟹	棒打ち人数	
⑰	フサマラー蟹	獅子被ビ人数	▲獅子被ビ人数
⑱	ガーシメー蟹	包丁人数	▲腕振る人数
⑲	ヤフチャン蟹	神饌人数	
⑳	フノーラ蟹	膳配人数	
㉑	パルマヤー蟹	給仕人数	▲棒打ち人数
㉒	ダーナー蟹 (再)	見物人数	

注：⑥～㉒は喜舎場永珣『八重山古謡 (上)』(沖縄タイムス社)の前掲六～二二に出てくる蟹名。▲は宮良當壯『八重山古謡』(『宮良當壯全集』11、第一書房)。

字大川の「網張のみだが一まユンタ」におけるこうした違いは、地域の観察者の異見とみるよりも、歌が伝播し歌いつがれていく過程で生じたものであろうか。

この「網張のみだが一まユンタ」と似た古謡が石垣島から遠く離れた波照間島にもある。波照間の浜に棲息するパルマミチィダガという蟹を主題とした「ばるまみちいだがユンタ」である（喜舎場永珣『八重山古謡（下）』632～633頁）。

一	パルマミチィダガ	パルマミチィダガ（ツノメガニ）が
二	ウルズンヌ クルダラ	陽春になったので
三	スーンチバ 上ヌヤーカイ	潮が満ったので 上の住み家へ
四	スーヌピシバ 下ヌヤーカイ	干潮時には 下の住み家へ
五	バガナツヌ ナルダラ	若夏になったので
六	ウルジィンヌ ナルダラ	陽春になったので
七	カニク地カイ スブリョウリ	陸上の砂地に 上って行き
八	ユナグ地カイ スブリョウリ	砂子地の上方へ 上って行き
九	アキィ夏ヌ サリユトラ	収穫時の夏に なったので
一〇	パイ夏ヌ タツダラ	夏至の夏が 来たので
一一	粟ヌプーバ アチィミョウリ	粟の穂をば 集めて
一二	米ヌプーバ アチィミョウリ	米の穂をば 集めて
一三	粟ジラバ チィンバシ	粟真積み（シラ）にして
一四	米ジラバ チィンバシ	米真積み（シラ）にして
一五	カニク地ヌ 豆ダキヤ	砂地の豆を抱いて
一六	ユナゴ地ヌ 豆ダキヤ	砂子地の豆を抱いて

この歌詞の一番～八番までを見ると、瓦葺き、茅葺きの歌詞はないが、潮の干満により住み家を移動すると謡うところは「網張のみだが一まユンタ」の前半とほぼ同じである。しかし九番以降は「網張のみだが一まユンタ」とは異なり、パルマミチィダガが穴の周囲に砂を高く積み上げる習性を、人間が収穫期に粟と米の穂を集めてうず高くシラを積む役のように描写している。パルマミチィダガはミダガーマ（ツノメガニ）と同じ蟹とみられるが、現在この古謡を歌える人はいないようで、どのような曲であったか知ることはできない。

### 【やぐじゃーま節】

西表島の東海岸、古見村の珊瑚礁の海に生息する蟹を謡った「やぐじゃーま節」という、三線伴奏を伴う「節歌」がある。それには逆に人間を蟹に喩えた歌詞が見える。節歌は「網張のみだが一まユンタ」のような農民ではなく八重山の土族が歌っていたものである。

- |  |   |
|--|---|
| <p>一 ウサイ<small>とうまりい</small>泊ヌ ヤグジャーマ<br/>「サーヤクザイ」<br/>作田<small>ちくてんぶし</small>節<small>なが</small>バ 詠ミヨウル<br/>「ヤーイ シューラーヨー」</p> <p>二 ウリガ<small>とうなりい</small>隣<small>しら</small>ヌ 白カチャヤ<br/>ウリニ合ショテイ 三味線<small>さみしん</small>バ弾キ<br/>詠ミヨウル</p> <p>三 生<small>ま</small>リル甲斐<small>しい</small>産<small>な</small>ディル甲斐<br/>ガサミナカ 子<small>ふあ</small>ば産シ<br/>ミヤムナ</p> <p>四 ウルジンヌ ナルダラ<br/>バガナツヌ ナルダラ<br/>イザラレヌ事<small>クトウ</small> 思<small>ウム</small>イ</p> <p>五 ウマユ見リバン カマユ見リバン<br/>炬<small>たい</small>ヌ火ヤ アカラパタラ シ<br/>走<small>ば</small>り来<small>きい</small>バ</p> <p>六 大爪<small>うふつみ</small>ユ ガナ爪ユ<br/>プチュルパタラ シ<br/>カカレヌ シンサ</p> <p>七 何<small>な</small>ユ頼<small>たぬ</small>ミ イカ頼マバドゥ<br/>我<small>わ</small>身<small>どう</small>ヤ 隠サリル</p> <p>八 ウフチイブシ トウンダブシイ<br/>頼マバドゥ 我身ヤ隠サリル</p> | <p>ウサイという泊のベニシオマネキは<br/>作田節を歌っている</p> <p>その隣にいるハクセンシオマネキは<br/>それにあわせて三味線を弾きながら<br/>歌っている</p> <p>生まれ甲斐、産まれ甲斐があつたら<br/>ガサミとの間に子を生んで<br/>みたいものだ</p> <p>陽春（旧暦二・三月）になると<br/>若夏（旧暦四・五月）になると<br/>漁火のことを思い心配になる<br/>そこを見ても、あそこを見ても<br/>炬火の光がぴかぴかと輝いて<br/>走って来るから</p> <p>大きな螯を、頑丈な螯を<br/>ぼきんぼきんと<br/>折られる辛さよ<br/>何を頼って どのようにして<br/>我が身を隠せば安全であろうか<br/>樹の大きな呼吸根で凹凸した節の間を<br/>頼んでこそ我が身は隠せる</p> |
|--|---|

注：歌詞は喜舎場永珣『八重山民謡誌』304・305頁。

この歌には、ヤグジャーマ、シラカチャ、ガサミの三種類の蟹が登場する。ヤグジャーマは石垣の「網張のみだがーまユンタ」では「踊り人数」（大川の歌では「三線人数」）に擬せられた蟹で、シラカチャは「網張のみだがーまユンタ」にはその名称は見られないが、三味線を弾く人に擬せられた「ムミンピキィ蟹」に相当するであろう。

「やぐじゃーま節」では、ヤグジャーマが歌う「竹田節」に合ちくてんわせて、シラカチャが三味線を伴奏しているという描写である。「竹田節」とは琉球古典音楽の楽曲で「昔節」と称される10曲中の一つで、歌詞は「穂花咲ち出れば ちりひぢもつかぬ 白ちゃねやなびき 畦枕（稲の穂花が咲き出ると塵も泥もつかずに、白種の米の穂は風に靡いて畦を枕にしている）」といった五穀豊穡の歌や、国の始まり、音楽の始まり、治国平天下、同胞親睦、長寿繁栄など、すべて祝福の歌である（鳥袋盛敏『琉歌集』風土記社、1964年、

48頁)。音曲はゆったりしていて荘重である。

ガサミはガーシーメと言って、石垣の「網張のみだが一まユンタ」では「包丁人数」に、大川では「腕振る人数」に擬せられた蟹である。しかし「やぐじゃーま節」に出てくるガサミはこれとは全く異なる様相を見せる。ここではガサミが蟹類では最も体が大きい蟹であることに目が向けられている。すなわち体が小さくて弱いヤグジャーマやシラカチャは、蟹としての生き甲斐を持って生まれるなら、自身よりも体が大きくて強いガサミとの間に子どもを産んでみたいと、羨望の的になっている。そうしたガサミは、人頭税の納税に苦しむ八重山の農民からすれば、取り立てる側の士族役人に比すこともでき、あるいは八重山の士族役人の立場からすれば八重山に圧政を敷く首里王府に比すこともできる。

しかし四番以後の歌詞では、陽春の頃、若夏の頃になると漁火が、ぱちぱちと音を立てて炬火がやって来ると、人間の足で踏みつぶされて螯をへし折られるのが辛い、どこに隠れて身を守ればよいか、マングローブ樹の根株などに隠れて身を守るしかないと言われている。これはヤグジャーマやシラカチャに限らず、ガサミについても当てはまることで、炬火を持ってやって来る人間は、八重山からすれば首里王府、そして上には上があるように、首里王府からすれば薩摩に比することもできよう。そういうところに着目した伊波普猷は、『古琉球』の中で、「小さき蟹の歌」と題して「やぐじゃーま節」は弱者の心理、琉球民族の心理を謡ったものと思われてならないと述べている（『伊波普猷全集』第一巻、平凡社、1974年）270～273頁）。

これ以外にも蟹が登場する八重山歌謡がいくつかある。大川の「山原ユンタ」（喜舎場永珣『八重山古謡』（上）113頁）には、

一	クリ程ヌ 十五日ヌ	これほどの十五夜の
	月ヌ夜ヤティカラ	月夜であるから
一	ハルマヤーザーギドゥ	ハルマヤー（ユノメガニ）でさえも
	ユニ下リシ	白洲浜辺に降りて
	遊ビョウル	遊んでいます
一	我ガケーラヤ	吾々みんな
	浜下リシ	浜辺に降りて
	アマヨウラ	遊びましょう

とあり、十五夜に男女の若者が浜辺で三味線を弾きながら遊ぶ「浜遊び」に、夜行動するハルマヤー（ツノメガニ）を引き合いに仲間を誘っている。

また黒島には「さしぬ蟹アユ」（『八重山古謡』（下）143頁）という古謡がある。アユはアヨウとも呼ばれ、ユンタ、ジラバのような古謡の一つのジャンルであるが、その中に

蟹が出てくる。

- |   |                            |  |
|---|----------------------------|--|
| 一 | サシヌガンニン<br>ブンピカナ<br>ウブヤヌシ  | 砂中に棲む蟹のように<br>家の分格を引き下げないように<br>大母屋主にきた嫁女は     |
| 二 | ニーヌガンニン<br>ダイピカナ<br>ニーブヤヌシ | 土中に棲む蟹のごとく<br>家の土台を引き下げないように<br>根母屋主の主婦となった花嫁よ |

サシヌガンは砂浜に棲む蟹のことで、ツノメガニとミナミスナガニが該当すると言われ、ニーヌガンは土中の巣穴に棲むオカガニのことである。これらの蟹が甲羅に合わせて穴を掘って自らの棲み家とする習性を、嫁ぐ女に対して、夫の家の家格に応じて分限をわきまえたふるまいをするように諭すことの喩えに用いている。

また黒島の歌謡には「ぺんがん捕れ一節」（『八重山民謡誌』252頁）という、黒島の6村の集落の男女が各々の集落近辺に棲息する海陸産物を捕獲採集して自慢しあう歌がある。その冒頭の歌詞に、

<small>みやんざとう みやらび</small> 宮里 女童	宮里村の乙女たちは
<small>まい びー</small> 前ヌ干瀬ヌ	村の前の珊瑚礁上にすむ
ペンガン捕レー	ペン蟹を捕るのが上手

と謡われるペン蟹は、珊瑚礁上に生息する蟹でイワオウギガニと考えられている。

「黒島口説」（『南島歌謡大成 IV八重山篇』555頁）の囃子にも次のように見える。

<small>くろしまみーどうんたー</small> 黒島 女 達 が	黒島の女達が
<small>ゆび はまう</small> 夕ぬ 浜下りさみへ	夕べの浜下りで
<small>はまがんとう</small> 浜蟹取らんでい	浜蟹を取ろうと
<small>ゆくあしちか</small> 足や高足 横足使とてい	高足、横足で近づいたら
アリアリあだんぬ中から	それぞれ アダンの中から
<small>うふちみ</small> 大爪打ち振り振り	大きな爪を打ち振り
あがきちゃあぶ へいへい	挟まれ痛かった

ハマガンは、旧暦四、五月の十五夜に大群をなして放卵のため海に下りてくるウリカンで、オカガニと見られているが、浜に出てこの蟹を捕ろうとする娘たちの仕草が、おもしろおかしく詠まれている。